

魔王2099

サイバーパンクシティ

1. 電子荒廃都市・新宿

紫 大悟



ファンタジア文庫

3050

口絵・本文イラスト クレタ

餓竜が、喰らう腐肉の生涯に思いを馳せる事がないように、
輝かしい文明発展の恩恵を享受する者達もまた、
その下に積み重ねられた憐れな屍に関心を抱く事はない。

プロローグ 剣と魔法のファンタジー

大陸暦一五九九年、竜の月、十二日。

地下魔王城逆天守、玉座の間。

その一閃を以て、アルネスに存在するとある一つの物語が終焉を迎える。

流麗であった。

勇者がその手に持つ白銀の剣から放たれた斬撃は、一条の光となって大気を切り、霊素を裂き、宿業を断ち——魔王を斬った。

ヒトと魔族の生存競争、定命と不死の覇権をかけた戦争、勇者と魔王の最終決戦、後の世で『不死戦争』と呼ばれるその戦争は、ここに勇者を旗頭とする定命の軍勢の勝利で決着が付いたのである。

戦場と化した魔王城の玉座の間は、一瞬の轟音の後に静寂に包まれた。

禍々しくも荘厳な玉座の間は、先の戦闘で柱は折れ、真紅の絨毯はぼろ布となり、玉座は粉々に砕け散っている。

相対するは二つの影。

此方、青の外套の下に白銀の軽装鎧を纏い、眩い輝きを放つ銀の聖剣《イクサソルデ》をその手に携え、剣の輝きよりも更に煌めく意志の光をその瞳に宿した、金髪碧眼の人間の青年。

彼方、振くれた二本の角を戴く竜の頭蓋を頭部とし、闇が滲んだかのような漆黒の片刃剣、魔剣《ベルナル》を持ち、同色の外套に身を包んだ巨大な異形。

天を穿つような二本の角は今や片方が半ばから折れ、竜の頭蓋も大きな切創と何条もの罅が走っている。

異形がその顎を開き、霊素を震わせた。

「見事だ、勇者よ」

儼乎たる声音で、臍腑に響くような低い声が玉座の間に響き渡る。

魔王はその手に持つ魔剣を取り落とし、剣は黒い霞となって散っていく。

勇者によって体を両断され、致命の一撃を受けた魔王は、その巨大な異形の身体末端から枯れ葉のように崩れていき、闇色の外套の中から長い黒髪の男が姿を現し、投げ出されるように地に膝をつく。

それは、異形と化していた魔王の本来の姿であった。

「よくぞ……よくぞ定命の身で余を討ち倒した……その強さ、そして何よりもその勇気を余は称えよう」

魔王は己を打ち倒した勇者に、心からの惜しめない賞賛の言葉を投げかける。

「そう、か」

勇者は目を閉じ、魔王の言葉を噛み締めるように聞き入っていた。

「君も強かった……本当に……」

「……」

魔王も、勇者の言葉に沈黙で返す。

互いに憎むべき仇敵であり、最大の宿敵であり、唾棄すべき怨敵であり、自らの正義に対する滅ぼすべき悪である。

しかし戦いの果て、両者の心の中はとも晴れやかであった。戦いを通じて、怒りや憎しみといった感情の外の境地へと達していた。

「何故負けた」

魔王は勇者に問い掛ける。

「余は、何故負けた……何故、貴様は勝てたのだ……」

魔王は不死の魔族だ。

仮令手足がもがれようとも再生し、心臓や頭が潰れようとも死ぬ事はない。生命の理から逸脱したモノ——不死。

魂が存在する限り生き続ける死を超克した存在。

だが彼は今、終焉の時を迎えようとしている。

幾度も聖剣から受けたダメージは、魔王の魂を枯渇させた。肉体の死ではなく、魂の滅び。それこそが魔王の終焉であった。

身体はもうほとんど動かす事ができず、魂の残り火も後わずか。ただ塵へと還り、滅びゆく運命である。

「軍略も、軍勢も、そして余も……何もかも全て、ちっほけで儂い定命より勝っていた……何一つ、劣っているものなどなかった……負けるはずなどなかった……だが余は、余達は負け、貴様が勝った。何故だ？ 教えてくれ、勇者よ」

魔王の問い掛けに、勇者は答える。

「……命だ」

「命……?」

「僕達には命がある。君達にとってはちっほけで儂くて、弱く短い命かもしれない。無限の命を持つ君達の方が優れているのかもしれない」

「だけど、と勇者は続ける。

「だからこそ、弱く儂い僕達は必死に生き足掻く、弱いからこそ強くあろうとする。だから、僕は……僕達はその命の輝きを見出したから、勝てたんだよ。きつと」

「……ふざけるな。そんなくだらないものに、余が負けたなどと……」

「別にふざけてなんているよ」

「命の輝き……認められん、そんなものは……」

勇者の言葉は悠久の時を生きてきた不死にとつて、理解できないものであった。あるいはそれは、遙か昔に持ち合わせ、そして忘れてしまったものなのだろう。

「それでも僕達が勝った。これはヒトの持つ光の勝利なんだと、僕はそう信じている」

「……………心せよ勇者よ。ヒトの光が在る所には闇もまた存在する。そして闇が在る限り余は何度でも光の前に現れよう、余は不死の王ではなく不滅の王なのだから」

「ならば、僕は何度でも闇に立ち向かうよ」

「そう迷いなく言葉にした勇者の瞳には、希望の光が満ちていた。

「さらばだ、我が最大の怨敵——勇者グラム」

「さらばだ、我が最悪の宿敵——魔王ベルトル」

勇者は聖剣を振り上げる。

そして、魔王ベルトルの頭を勇者グラムは斬り落とした。

魔王の眼に僅かに宿っていた光が霧散し、その体も黒い砂のように散っていき、やがて虚空へと溶けるように消えていく。

その様子を、勇者は己の目に焼き付けるように見つめていた。

「……帰ろう、皆の場所へ」

剣を杖代わりにして疲れ切った体を起こし、勇者は希望に満ちた明日へと歩みだす。

——終幕。

なれど世界は続いていく。

魔王

THE LORD OF IMMORTALS
BLOOMING IN THE ABYSS
F.E.2099

2099

紫大悟

ILLUSTRATION クレタ

DESIGN KAI SUGIYAMA

サイバーパンクシティ

1

電子廃市 電芒都新 宿

第一章 サイバーパンクシティ 電子荒廃都市・新宿

——そして五百年の時が流れた——

それは原初の産声、新たな胎動。

復活の時、来たれり。

再誕は、水底から浮き上がる感覚に近い。

暗い水の底からゆつくりと浮き上がるように、意識が上昇していく。

——そうして彼は五百年の時を経て復活した。

ベルトール・ベルベット・ベルシユバルト。

不死の王、闇の支配者、不滅者、その他にも様々な異名で呼ばれる、定命にとっての

恐怖の象徴にして絶対悪。

その中でも彼が最も多く呼ばれた名。

魔王。

五百年前、不死の王国を作り上げ、不死の軍団を纏め、世界を支配せんと命ある者達と戦いを繰り返して、そして最後に勇者によって斃されたはずの存在。

その身は確かに朽ち果て、闇へと還った。

しかし、今長き時を経て復活を遂げたのである。

それを成し遂げたるは《転輪の法》。

ベルトールが完成させた魔法であり、肉体の構成と記憶、そして魂を結びつけて情報へと変換し、それを未来へと飛ばし、その情報を元に霊素によって肉体をエミュレートし、再構築する転生の魔法。

霊素とはあらゆる事象を模倣できる万能の物質。そして魔法はその霊素を操りこの世界の理を捻じ曲げ、書き換える術法である。

理論的には魔法でできない事は存在しない。死者の蘇生、時間の逆行、宇宙の創造……正しい術式とそれに見合う魔力さえあれば、どんな荒唐無稽も実現可能。

転生もその一つだ。

ベルトールがその理論を完成させつつも、成功例の存在しなかった机上の禁術。

ベルトールは魔族である。魔族は例外なく不死の存在だ。そして不死は死の概念を超越した存在である。

だが魂は摩耗する。肉体が不死ではあろうと、魂は不滅ではない。魂が擦り切れ、燃え尽きればやがては滅ぶ。そして、その滅びすら克服するのが《転輪の法》^{メテノエル}。肉体が朽ち、魂が滅びても、再び現世へと舞い戻る反魂の御業^{みわざ}。彼は昇華した。

ただの不死から、この魔法を完成させた事により霊的上位存在として魂の位を上げ、不滅の存在へと成ったのだ。

そして五百年の時を経て、再び世界を闇で覆い、今度こそ支配せんと今ここに再誕したのである。

(成功、したのか)

まるで深い眠りから目覚めた時の微睡み^{まどろみ}のような鈍い思考で、ベルトールは己の二度目の生を確認していた。

当然ながら、実際に《転輪の法》^{メテノエル}を使うのは初めてであり、確かな理論と術式を完成させながらも運用試験等^{じゆん}はできるはずもなく、これが初めての行使である。

ベルトールの姿は五百年前の勇者と戦っていた時の異形の姿ではなく、朽ち果てる際のヒトの姿をしていた。

濡れた鳥^{からす}の羽^うの如き妖艶^{ようえん}さを醸^かす漆黒の長い髪に、初雪のように美しい白い肌。女性の繊細な美しさと、男性の精悍^{せいけん}さが見事に両立したような中性的な顔立ち。その眼窩^{がんか}に収まるのは、闇色の瞳。

手足がすらりと伸びているのに加え、頭身が高い為^{ため}に一見すると長身瘦軀^{しうちく}に見えるが、その全身は鋼のような筋肉に覆われて引き締まっており、見事なプロポーションと言える。そしてその芸術的なまでに完成された肉体を、一糸まとわぬ姿で惜しげもなく外気に晒^{さら}している。

魔王の見た目は人間と同じだ。オークのように牙が生えているわけでも、エルフのように耳^{みみ}が尖^{とが}っているわけでも、オーガのように角が生えているわけでもない。

それもそのはず、ベルトールは元人間だ。

不死は神々や生命の理^{ことわり}から外れた超常の存在であり、定命達は畏怖を込めて、ヒトの身で不死となり、ヒトの姿をしながらヒトならざる力を持つ彼らを魔族と呼んだ。故に、不死であるならば人間もエルフもオークも全て魔族なのである。

ベルトールは人間の年齢で言えば二十歳手前といった程の年頃に見える。だが彼は齢三千歳を優に超えている最古の魔族の一人であった。

(こゝは……)

彼は白い石で造られた祭壇の上に横たわっていた。

《転輪の法》の影響なのか、ベルトールの視界はほやけて状況を把握できていない。

一度大きく深呼吸をして冷たい空気と、そこに含まれる靈素を肺に満たす。

肺に満たされた靈素は血管を通じて心臓へ向かい、心臓で魔力へと変換される。

血管の一本一本、神経の一筋一筋、細胞の一つ一つに魔力を巡らせていく。

魔力は魔法を行使する為の燃料であると同時に、生命活動を行う為に欠かせない要素の一つである。

眼球の隅々まで魔力が満ち、ようやく視界が戻ってくる。

薄暗く、広大な場所に自身はいるのだという事は理解できた。

「ベルトール様……」

声が聞こえた。

彼のよく知る声だ。水鈴を鳴らすような清らかで、透き通った声。

五百年の眠りにあっても、決して忘れる事はない、聞き違える事のない声だ。

「マキナか」

声の方を見れば、少女が一人跪いていた。

雪のような、そう形容するのが相応しい可憐で儂げな少女であった。

抜けるような白い肌に、長い白銀の髪、薄紅色の瞳。恭しく膝をつき、伏せられた顔は、彼女の小柄な体軀と相まって美しいというよりは可愛らしいという表現の方が合っているものの、その全身から漂う妖艶な色香は少女の姿のそれから大きく逸脱しており、実に蠱惑的な魅力を纏っている。

外見的には人間に非常に近いが、マキナは人間とは別のイグニアという種族である。

「はい、六魔侯が一柱、煌灼侯マキナソレージュ。この時を竜の鱗が落ちる程にお待ちしておりました」

六魔侯とは魔王ベルトールが任命した、強力な力を持つ六名の魔族の大貴族の事である。

マキナはその中でも一際ベルトールに重用された忠臣であった。

マキナが面を上げた。

年の頃はベルトールより少し下くらいだが、彼女もまた不死であり、魔族の一人だ。年齢は千を超えている。

「このような格好での拝謁の無礼、どうぞご容赦くださいませ」

彼女が今纏っているのは、象徴でもある華美な赤の礼装鎧ではなく、厚手の白いコートと同色の帽子だった。

その格好、そして今の状況は不自然である。

魔王の再誕である《転輪メテノエルの法》の成就じょうじゆは、不死の王国にとつても大典。儀礼用の礼服を纏い、国民総出で盛大に出迎えるべき重要な儀式だ。

だといふのに、薄暗く粗雑な空間に、マキナ一人だけといふのはおかしな事である。となれば、何かあつたという事。

ベルトールはマキナの礼を欠いている格好を不問とした。ベルトールはマキナの忠誠心に絶対の信頼を置いていたし、その彼女がこのような格好をしているといふのは、相応の理由があるのだからと考えたからだ。

「よい、余の再誕によくぞ駆け、《転輪メテノエルの法》を成功させた。褒めて遣わす」

「ベルトール様の家臣として当然の事。私めには勿体無もったいないお言葉にございます」

《転輪メテノエルの法》で魂を復活させるには、いくつかの条件がある。然るべき場所、そして然るべき時間に発動させる術者が必要になる。

《転輪メテノエルの法》は単独の魔法ではなく、《転輪メテノエルの法》を自身に掛けて復活する術者と、復活させる魂を呼び出す術者が必要な儀式魔法なのだ。

ベルトールは身体からだを起こす。

「それで、ここはどこだ。レーデルムの地下祭壇か？」

言いながら、白骸石エスクリアで造られた祭壇から降りながら腕を振るうと、儀式動作に反応して

その裸体に靈素エーテルで編んだ黒い外套がいのうと同色の軽装鎧よろいが纏まとわつた。

「いえベルトール様、ここは旧新宿駅ネルドア地下大聖堂迷宮です」

「シンジユク……？」

聞き覚えのない言葉に首を傾かたむげた。

ネルドア地下大聖堂はベルトールも知っている。彼の住む世界、アルネスの東の果ての島に作らせた魔王崇拜の為、そして魔王再誕の為の祭壇のある聖堂だ。

だがシンジユクという言葉は聞き覚えがなかった。

「まあいい」

瑣末事さまつだとベルトールは聞き流した。

五百年も経たっているのだ、地名など当然変わるものである。

ベルトールの目的の為に、そんな事に拘泥こうにしている場合ではなかった。

「さあマキナ——魔王は今復活を遂げた。再び余と共に世界アルネスを支配しようぞ！」

世界の支配。

それこそがベルトールの成就すべき大願であり、不死達にとつての悲願であつた。

「あの……」

ベルトールの言葉に、マキナは恐る恐るといった風に口を開いた。

「御言葉ですが、ベルトール様」

「なんだ？」

マキナは明らかに言い淀んでいた。

一瞬の逡巡の後、覚悟を決めた目で、ベルトールを見つめてこう言った。

「——我々の支配すべき世界はもう……滅びてしまいました」



「今から約八十年前の話です」

マキナは迷宮の通路を歩きながら、言葉を紡ぎ出す。

「我々の住んでいた世界——魔法文明惑星『アルネス』と、別次元に存在した異世界、機械文明惑星『アース』は未曾有の大災害に巻き込まれたのです」

アース、西暦2023年、一月。

アルネス、大陸暦二〇二三年、巨牙獣の月。

奇しくも広く普及した暦が一致した二つの惑星が存在する世界そのもの——次元、あるいは宇宙と言い換えてもいい——が融合したのだ。

そうマキナは語る。

「融合……だと？」

「はい。この災害は、アースの学者によって、フアンタジオン理想融合グと名付けられました」

「フアンタジオン理想融合……」

理想融合は当然ながら様々な問題を引き起こした。

世界、そして惑星そのものが融合してしまった為に、大規模な地殻変動、天体変動、気候変動を引き起こし、最初の三年でアースとアルネスの合計人口は十分の一にまで減った。

そしてその後起こったのは種族間の対立だ。

片やアースは単一の種族、人間が支配していた単一種族世界、片やアルネスは人間以外にもエルフ、オーク、獣人、オーガ、ゴブリン、ドワーフ等の多数の種族が領土を分割して生活していた多種族世界。

アース側も人種や宗教、政治で争いになるのだし、アルネス側にも当然それらの争いは存在し、加え種族間での諍いも存在していた。

「言葉や文化のみならず、見た目も大きく違う、別の世界の住人達……更に、それぞれの視点からすれば元々自分達が住んでいた土地に急に現れたように見えませんでしたから……」

「争いが起きないはずがない、か」

「はい……」

マキナは頷く。

既存インフラの完全なる崩壊、食糧難、疫病の蔓延^{まんえん}、居住権や領土権の問題、技術格差、そして種族間の偏見と対立がやがて大きなうねりとなって殺し合いへと発展するのに、そう長い時間を必要としなかった。

理想融合^{フュージョン}の騒乱の中、様々な種族、領土が混線したために従来の領土はその意味を消失し、国家というコミュニティは完全に機能を停止した。より小さなコミュニティである都市が独自に国としての役割を持つ事になるのは、自然な流れだと言えよう。

その都市間でも争いが起こり、二度に渡って行われた計四十年近くにも及ぶ『都市戦争』という大きな戦争を経たのが現在だ。

「第二次都市戦争が全面終結して二十余年、ようやく戦争の傷跡も癒えてきた……そんな時代が現在の状況でございます。そしてここはアルネスでいうところの東の果て、ミルド列島の旧ネルドア地下大聖堂と、旧東京都新宿区に当たる場所です」

迷宮の中を先導しつつマキナはそう説明する。

マキナの説明を、ベルトールは完全には理解できていないでいた。

より正確には実感が湧かないといった所か。あまりにも突拍子のない話であり、現実感

のないお伽噺^{とぎばなし}を聴かされているようであった。

だからベルトールの視界には、錆びついて朽ち果てた改札口や、券売機の様子までは入っていないかった。

「ベルトール様の知る既存の世界は滅び、今は新しい世界が築かれています」

旧新宿駅ネルドア地下大聖堂迷宮は、新宿駅構内と、異界化された迷宮であるネルドア地下大聖堂が融合した結果、駅が存在そのものが歪^{ゆが}み、迷宮化したものである。

動きの止まったエスカレーターは、長さにして五十メートル以上に伸びている。

長いエスカレーターを登りきった先、迷宮の出口にたどり着いた。

「——統合暦2099年」

目の前には、一枚の鉄扉^{てつび}が重く口を閉ざしている。

「これが、新しい世界の姿です」

重い鉄扉が開かれると、光が差し込み、ベルトールは目を細めた。

世界が、見えた。

ベルトールの目に飛び込んできた外の景色は、彼の想像を大きく超えるものであった。
圧倒的なまでの光だ。

エネルギー素反応灯が放つ、目が痛くなる程の極彩色の光。

ビルの窓から漏れる光。

ビル壁面の巨大なホログラム・ディスプレイの動画広告が発する光。
建物の軒先に吊るされた赤い提灯の光。

地を這うように道を行く地走車のテールランプの光。

空を飛び交うドローンや空走車のナビゲーションライトの光。

光、光、光、光……………。

夜だというのに、まるで星を地上に落とし、この世の闇を全て打ち払うかのような眩い
光の情報量に、ベルトールは圧倒されていた。

不死の王都や、帝都アストリカの城下の光などとは比べ物にならない程の莫大な光量。
それらは眠らない夜の街の光だ。



寒々しく重々しい色の空は遠く、夜の闇を分厚く真つ黒な雲で蓋をしており、そこに設置されたスピーカーから警報が出ない程度に汚染された雪がちらちらと極彩色の光を浴びて舞い降りている。

「な……」

ベルトールは目を見開き、呆けたように口を開いて周囲を見回す事しかできない。

街の中心部には高さ二百四十三メートルの巨大な柱、——地中に存在する霊脈から霊素を汲み上げて魔力と電力に変換し、街に供給する——エテルリアクターが聳え立っており、その内部魔力を用いて広範囲に耐寒領域結界を形成している。

だが、それでも外気は昼間でも場所によっては氷点下に割り込むし、結界の領域外に出ればすぐさまヒトが住むにはあまりにも厳しい極寒の世界が待つ。

そしてそのエテルリアクターを囲むように真新しい新エルヴン調建築の細長い白亜のビルがところどころに顔を覗かせ、それに対比するように安全性を徹底も考慮していない安っぽく背の低い鉄筋コンクリートの建築物や、鉄骨で粗雑に足場を組まれて縦方向に増設を繰り返したトーフ・ハウスの群れが墓標のように立ち並ぶ。

樹木のように電柱が林立し、まるで蜘蛛の巣のように幾条もの送電ケーブルが張り巡らされ、人間、エルフ、ゴブリン等の様々な種族の人々が薙めき合うようにして通りを歩き、

共通語、日本語、英語、中国語、ドワーフ語、オーク語といった言語と監視ドローンが周囲を飛び交う。

「なっ……」

あちこちにある複雑なビルの壁面からは飛び交う言語と同じように様々な文字で書かれた霊素反応灯の看板の群れが飛び出しており。そして血管のように張り巡らされたパイプや排水溝からはスチームが吹き出す。

地面には代用紙のチラシや合成煙草の吸殻、密造酒の酒瓶や缶といったゴミがあちこちに散らばっており、『止めよう！ 路上生活！ 凍死の危険性があります！』と共通語で書かれた啓蒙ポスターの下では、汚い布に包まったルンペンが生きているのか死んでいるのかもわからず転がっている。

そこには、ベルトールの知るどの国の文化も景観もなかった。

「なんなのだ、これはああああああああツツツツ!?」

異様な世界を見て、魔王は思わず空に向かって驚愕に叫んでいた。

ここは電子荒廃都市・新宿市。

総人口三百万人以上を擁する、世界有数の大都市。その中央部から南に走る大通り、新宿市一の繁華街、歌舞伎町ストリートに魔王は立っている。

「たかだか五百年で、文明は進みすぎていた。

多くのヒトや地走車グラウンドレベルが道を行き交い、宙空には空走車や監視ドローンと、その倍以上の数の配送用ドローンが飛び交っている。

まるで現実感のないその光景に、魔王はただただ圧倒されるだけだった。

「東方の島ですら、今はこんなに栄えているのか……」

ベルトールの知る日本列島——すなわちミルド列島は、流刑地としての役割しかない未開の島であつたはずである。

罪人達が洞穴に住み、原始的な生活を送っていたのがベルトールの最後の記憶だ。

「アース側のこの列島を治めていた国が発展していったというのが一番の要因です。アース側の高い科学技術と、我々の魔法——アルネスの魔導技術という異なる概念同士が結びついた結果、パラダイムシフトが起こり、急激な発展を遂げたのです」

「だがこれ程までに定命達の文明が発展し、神々は何も手を加えないというのか……？」

「神は死にました」

異なる世界同士の融合という大災害を受けたのは何もヒトだけではない。

異世界の住人という異物の混入、異なる宗教の流入、価値観の変化、終末思想の流布、道徳心や倫理観の変革、それらによる神秘の陳腐化と信仰の薄弱化。

神の存在は失墜したのである。

「理想融合の際に既存の文明は大きく後退しましたから、ある意味それが神々の最後の怒りとも取れるという学者もいます」

「そうか……本当に世界は滅んだのだな……」

その言葉にはどこか哀愁が漂っていた。

かつてのアルネスでのベルトールの戦いは、定命の者達との戦いだけではない。神々が創り出した運命との戦いでもあった。そして彼の与り知らぬところで、一つの戦いが終わっていたのである。

視線を落とす。

通りを歩く人々の姿も、ベルトールから見て異様なものであった。

「この辺りの連中の腕や脚……生身のものではないのが多いな」

通行人には、銅や黒い謎の素材で作られた腕や脚を付けている者が多く見受けられた。

「彼らは義肢を付けていますから」

「義肢……？ あれがか？ 随分と真に迫っているな」
 義肢というのはベルトールの時代にも存在していた。

とはいっても作りは単純かつ粗末なもので、木や骨等を加工して手足の形を模した物が大半であった。

「魔導義肢です。金属製フレーム……骨に合成ミスリル繊維を束ねた人工筋肉で作られていて、^{「素素」}素素で構成された疑似神経を元の腕や足に接続する事で動かしています」

「これだけ多いのは戦争のせいか？」
 「戦争の影響も多分にあります、この辺は肉体労働者が多いですから恐らくはその関係です」

「事故が多いという事か？」

「それもありますが、凍傷の影響も大きいですね、境界の外で作業する労働者も多いですし、外は本当に寒いので……」

確かにこの街の寒さはベルトールにとっても少々堪えた。

耐寒領域結界にいても、防寒の用意がなければ手足の先や耳や鼻が痛くなる程の寒さだ。常人がこんな環境に何時間もいれば、凍傷になるのは当然であった。

「ちなみにああいっただ魔導義肢を付けている者達をマギノボーグと呼ぶのですが、それも

最近では差別的だといった声も上がっています」

「ふむ……ではあやつらは？」

バケツのような金属の筒や、兜のようなものを被っている者もちらほらと見受けられる。その体は鎧のような金属で覆われており、その上から衣服を纏っている。

「彼らは全機身と言って、身体機能を機械で補っている者達です。魔導義肢の全身版、と言えばわかりやすいでしょうか」

「……いや待って待って、身体機能を機械で補うだと？ その、内臓もか？」
 「はい、脳と脊髄以外を機械に置き換えた者も少なくありません」

ベルトールがいた時代にも、機械という概念は存在していた。だがそれは今よりももっと簡素で原始的なものだ。四肢だけならば理解も及ぼうが、内臓までも機械に置き換えるなどというのは想像もできなかった。

「後はヒトを模した機械人形等も存在します。最近のは出来がいいですからほとんど見分けが付かないくらいです」

義肢や全機身の他にも、人々はどうなぞの辺りに金属片のようなものを貼り付けているのが見えた。同じ物はマキナのうなじにも付いているのだが、フードと長い髪の毛で隠れてベルトールからは見えなかった。

彼らのうなじに付いているのも義肢の一部なのだろう。そう考えながら人の往来の中で立ち尽くしていると、ベルトールは向かって来る人影に気付くのが遅れた。

「あ、ベルトール様、あたっ」

「チッ！ ほーっと突っ立ってんじゃねえぞ！」

通りを歩いていた大柄な義手のオーガが、ベルトールを庇^{かば}ったマキナとぶつかって舌打ちをする。

「すまない、考え事をしていた。大丈夫か？」

「あつ、はい。大丈夫です。申し訳ありません……」

「全く、でかい図^ず体^{たい}のくせに六魔侯の誰にぶつかったのかすらわからぬようだな」

ベルトールは夜空を覆う分厚い雲を見上げる。

「……」

そして、にやりと笑った。

「どうかなさいました？」

「愚鈍な定命共に、魂で理解できるように教えてやるとするか……王の凱旋^{がいせん}を、な」

「べ、ベルトール様？」

こういう笑い方をするベルトールは、突拍子のない真似^{まね}をするのだとマキナはよく知っ

ていた。

「——はあっ！」

ベルトールの体内の魔力が起動し、術式を構築して巨大で緻密な紋様が描かれた円形の魔法陣が展開される。

「《^{エル・ストナ}全天傅^{てんてん}け》」

言葉と同時に陣から光の柱が伸び、分厚い雲を貫き、ぽっかりと穴を開けた。

穴から夜空が覗き、実に一年と三ヶ月ぶりに新宿市に月と星の光が射し込む。

ベルトールが行ったのは、^{エーテル}靈素操作事象^{れいそさくさ}改変法^{かいへんぽう}。即ち『魔法』である。

体内の魔力の『起動』、呪文による術式の『構築』、構築した術式を魔法陣として外部に『展開』、展開した術式の呪文を読み上げる『詠唱』、発動する為^{ため}の魔法の名前、即ち魔名の『宣言』。

以上の五工程を経る事で発動できるのが魔法だ。

古エルト語で宣言されたそれは、古より為政者が己の王威を示す為に用いた大魔法。その大魔法を扱うのに、ベルトールは五工程の一つ、『詠唱』を必要としなかった。

魔法発動までの工程、それは魔王でさえも無視する事はできない理だ。

だが魔王の持つ膨大な魔力と、天性の魔法センス、超高速の魔法演算処理能力は、魔法発動の工程の中で最も時間を必要とする『詠唱』を『宣言』の中に圧縮して組み込む事で、疑的に省略する事を可能とした。

それこそが魔王を魔王たらしめる禁断の秘奥、《無詠唱法》である。

「……………」

ベルトールは空を見上げ、現れた光射す月を見て不満げに目を細めた。

「いくらなんでも力衰えすぎであろう、余」

本来ならばこの周囲一帯の雲を完全に消し飛ばす程の天候操作を行える大魔法である。

しかし、今のベルトールではせいぜい厚い雲に穴を開ける程度に留まっていた。

「あれは……………」

ベルトールは、雲に開いた穴から覗く空、月の横に赤黒く輝く星を見た。

それは、古よりアルネスで凶兆を示す星である。

「どうやら、この世界には歓迎されていないようだな」

星は妖しく、不吉な輝きを静かに放っている。

「な、なんだ……………!?!」

「急に空が……………」

「今時、天候操作魔法で、アホな事する奴もいるんだな」

そこで、だ。

けたたましいサイレンが周囲に響いた。

一定以上の魔力を検知するセンサーに、ベルトールの魔法が引つかかったのだ。

周囲のざわめきもどんと広がっていく。

「なんだ？　喧しいな、王の凱旋だというのに。余に対する礼儀がなっていないのではないのか？」

「いか？」

「あわわわ。市内での大魔法の使用は禁止されています！」

マキナが両手を振って狼狽している。

「都市警察が来てしまいます！　ここを離れましょう！」

マキナはベルトールの腕を取り、その場から無理やり引き剥がした。

「おいおいマキナ、何故余が逃げるような真似をしなければならないのだ」

「何卒、何卒！」

ベルトールは己の胸中のざわつきを振り払いながら、マキナに引かれ、人の波を縫うように大通りを進んでいく。

その途中である。

人の波の中、ありえないモノを見た。

フードを目深に被った男が反対方向から歩いて来る。

一瞬、風に煽られてフードの中の顔が覗いた。

「っ!?」

すれ違う。

ベルトールは思わず立ち止まり振り返る。

だがその姿は人の波の中に消え、最早見つける事は叶わない。

「如何なさいましたか?」

立ち止まったベルトールを怪訝に思ったマキナが問い掛ける。

「いや、なんでもない」

言って、ベルトールは頭を振った。

五百年後のこの世界に、あの男がいるはずもないのだ。

そう半ば自分に言い聞かせるように再び歩き出し、後ろ髪を引かれる思いを切り替える

ようにベルトールは手を開閉し、己の力の具合を確かめる。

「ふーむ……やはり出力にせよ、容量にせよ、魔力自体が五百年前と比べると大幅に減衰しているな。それに加えて身体がどうにも本調子とは程遠い。鎧を纏わずに戦場にいるかのような心許なさがある。我が事ながら、情けない話だ」

「今現在、ベルトール様の信仰力は大きく低下していますから……」

「ああ、それは感じている。今は只人程度の肉体強度しかない。不死の力もかなり衰えているな。余の存在自体が現代ではほとんど知られていないようだ」

——信仰力。

それは神々を始めとする霊的上位存在が、物質世界に干渉する為に必要な力である。

信仰、即ち対象を想う力——感情と言い換えてもいい——が強ければ強い程にそれが霊的上位存在に与える影響も大きくなるのだ。

それらを『正の信仰力』とする一方で、『負の信仰力』というものも存在する。

怒りや悲しみ、恐怖といった負の感情が該当し、霊的下位存在である悪魔の力となる。

方向性こそ違うものの、両者の根底にあるのは第三者が観測し、感情を向けるというものであり、まとめて信仰力と呼ばれ、定義付けられていた。

ヒトの身で肉体を維持したまま、その魂の位階を引き上げたベルトールは、言うなれば

神と悪魔の狭間の存在であり、信仰力の正と負、両方の影響を受けるのである。

五百年前、魔王として君臨し、不死やその同胞からは崇拜されて正の信仰力を得て、世界中に恐怖と共にその名を轟かせた事で定命からは負の信仰力を得たベルトルは、神々すら追隨を許さない程の強大な力を得ていたのだ。

「エルフでさえもその寿命は三百年程度。当時赤子であったエルフも死に、今やベルトル様は記録として語られるのみ。神々すらもその存在が忘れ去られようとしています」

信仰力の対義が忘却、或いは無関心だ。

信仰力とは、どれだけの数があるかの存在を認識して感情を向けているかで多寡が決まる。

第三者の認識や観測が存在しなくなると、その力は著しく低下してしまうのである。

それこそがベルトルが五百年前よりも弱体化している原因。時代の流れの中で、魔王ベルトルは他の神々と同じように、この世界の多くの人々から忘れられつつあるのだ。

「致し方あるまい。我々の生は無限にある、少しづつでも信仰力を取り戻していけばよろう。して、マキナ、他の六魔侯や貴族はどうした？ 魔王軍は？」

言いながらベルトルが通りの脇、細い路地の入り口に視線を向けると、火を焚いたドラム缶を囲んでオーガとオーク、獣人が殴り合いの喧嘩をしている所が目に入った。

「見た所、血の同盟者達も平和的に共存しているように見受けられるが。盟約はどうなっ

たのだ？」

血の同盟者というのは、魔王軍と盟約を結んだオーク、オーガ、獣人の三種族を指す。

世界を支配した際に、その三種族は優遇し、共に繁栄していくという盟約の下の同盟だ。

尤も、この同盟は四陣営の利害が一致した、一時的な協力関係である。不死側も三種族側も、互いの寝首をかこうと画策していたという背景があった。

不死は絶対的に数で定命に劣る。その数を補うための戦力が、血の同盟者なのである。

「血の同盟者は我が軍の敗北後、同盟を破棄。そして大陸暦一六一六年の『三刃革命』で三種族の盟主が討たれ、残った者達は定命の者に恭順しました」

「ふむ」

「その後の彼らの処遇は悲惨なもので、奴隷として過酷な労働に従事させられたと聞きます。今も潜在的にはありますが、そういった差別の残滓は根強く残っています」

「まあ、そうなるだろうな」

血の同盟者であるオーク、オーガ、獣人は、三種に共通した特徴として、魔法に対する適性が低いというのが挙げられる。その原因は魔力保有量であったり、教育水準の低さからくる魔法技術の未成熟さであったりと様々である。

それ故、古より他の定命は彼らを下に見ていた。それは彼らが他種族よりも強靱な身

体能力を誇るといふ恐怖感や劣等感に起因するものであり、魔法という技術がそれらを上回っている証左でもある。だからこそベルトールは彼らを同盟者として迎え入れたのだ。魔王が破れ、同盟も解体され、定命に恭順したところで彼らに待っているのは虐げられる未来だけであるのは、ベルトールには容易に想像ができていた。

「我々は、定命の者達と停戦協定を締結。青雷侯ラルシーン卿の下に集い、ベルトール様が復活できる時まで、息を潜める事に決めていました。ベルトール様が復活するまで百年を切った頃、理想融合で世界は滅びました。理想融合の動乱に巻き込まれたのは我々と同じ、不死の王国の民は散り散りに各都市へ移っていったのです。そして第一次都市戦争が終結した一年後、一部企業の主導で、各都市間とある運動が行われました」

「それは？」

マキナが一瞬口を噤んだ。

よほど言いにくいのだろう。その唇が震えている。

ようやく絞り出すように、言葉を紡ぐ。

「……『不死狩り』です」

「不死狩り……？」

「世界各地、各都市に散り散りになった不死を殲滅、ないし投獄する運動です。一部の不死は第一次都市戦争において多大な戦果を上げましたから、不死の存在しなかったアースにとつても、不死に対する脅威の記憶が薄れたアルネスにとつても、殺しても死なず、数々の実戦を経験していた不死の存在は大きな衝撃でした。そして不死、つまり魔族はヒトという種ではない悪性の存在として、第一次都市戦争終結から第二次都市戦争が始まるまでの間に、その駆除が行われたのです」

それは五百年前、いやそれ以上前の太古からアルネスでは一般的な認識であった。

不死である魔族はその超常的な力故に、定命から怪物として恐れられていた。

「我々も徹底抗戦の構えを取りましたが、魔導工学技術の発達で対不死用の武器が開発、量産され、それまで限られていた不死への対抗手段が増加した事により、不死と定命の間のパワーバランスが崩れ、我々は敗北しました」

「六魔侯は……どうなったのだ？」

「六魔侯は、壊滅しました……」

悲痛の色を滲ませて、マキナは言う。

「天忌侯メイ、黒竜侯シルヴァルド卿、青雷侯ラルシーン卿の所在は不明です。滅ぼされ

たのか、それとも囚とらわれているのか、あるいはどこかに潜ひそんでいるのかはわかりませんが、不死狩り後に一度も生存を確認できておりません。業わざ剣けん侯こうゼノール卿は、《転輪マワユルの法のり》の発動条件を聞かされていたのは私とラルシーン卿だけだったからと、私を逃がすために囚おとりとなって……一人敵陣に……」

メイ、シルヴァルド、ラルシーン、ゼノール。

誰も彼も、ベルトールに長く仕えていた不死の家臣達だ。

他者を失う悲哀など、とうに捨てたと思っていた。他者を慮おもはかる心など、とうに死んだと思っていた。だがベルトールの胸に去来したのは喪失感と空虚感だった。

「とはいえ、不死狩りも過去のものとなりましたし、不死に対する恐怖心を持つ戦中世代も減ってきていますから、当時よりは周りを気にする必要はなくなりました。以前は本当に炙あり出したの、無関係な定命に対する一方的な不死認定だの酷ひどかったですから……」

「不死狩り、か……」

そこでベルトールは気付く。一人足りないのだ。

六魔侯はその名の通り六名の魔族から構成される。

話に出たのは四名、マキナを合わせて五名だけだ。

「マルキユスは？」

血術侯マルキユス。

政まつりごとにおいてはラルシーンと共にベルトールを支え、更に不死の王国の魔導技術研究職のトップでもある元ダークエルフの魔族だ。

「……え、えーと……マ、マルキユス……卿は……」

マキナが視線を外し、指先を合わせてくるくと回し、その目が泳いでいる。

何か隠し事をしているのが丸わかりである。

それを指摘するより先に、マキナが大声を出した。

「そ、それよりベルトール様！ 喉は渴かわきませんか!？」

「え、いや別に——」

「お身体には影響ないとはいえ、この街の空気はベルトール様さまが吸うには汚れすぎています！ よって！ ベルトール様のお喉のどを労あつかむる為ために私、ちよつとお飲み物を買って参りますから、こでしばしの間待っていてください！」

「お、おいマキナ……」

強引に話を打ち切つてマキナはその場から離れ、その姿は人混みの中に紛れていった。マルキユスに関して何か都合が悪い事があるのか、あるいは話したくない事があるのか、それはベルトールにもわからなかったが、マキナがベルトールに嘘うそを吐く事だけはないと

理解していたし、話したくないという思いが先行して強引に話題を逸らしたのもベルトールを慮つての、忠心からの行動なのだろうというのは察しが付いていた。

「全く、仕様がないう奴だ」

やれやれ、といった風に呆れた口調でベルトールは言う。

「五百年前と変わらぬな、マキナは」

この様子であれば、この変わりきってしまった世界でも彼女は変わらずにやっているのだろうとベルトールは少しの安堵感を得ていた。

街灯の下で、ベルトールは周囲を見回す。

雑踏の中から聞こえるのは、人々の話し声や、よく通る客引きの声だ。

大通りの北側には、エーテルリアクターがランドマークとしてよく見えた。

正面のビルの壁面一杯を使った壁面大広告ホログラム・ディスプレイからは、大音量で軽快な音楽と共に空走車のCMが流れて来る。

『今、風となり、そして時を置き去りにする——新宿F V o t e Y受賞、貴方の暮らしを豊かにする、I H M I プレゼンツ、新型空走車【バーゲイン07】登場』

可愛らしいアバターを纏った流行りの三人組バーチャルアイドルユニットが、空走車に乗ってサイケデリックな光を放つトンネルの中を駆け抜けている。

「ほう……原理としては虚像投影の類か……？ それもこのサイズ、この精度で……魔力の無駄すぎるのではないか……？」

CMの映像を、呆けたように口を開いて食い入るように見つめている。

新宿市警察と漢字で車体に書かれた白黒の警邏車が、赤いランプを回して甲高いサイレンを鳴らしながら目の前を横切った。

「ん……？」

そこでベルトールは視線を巡らせた。

要素の微妙な揺れを感じ取ったのだ。

それは常人では決して察知できぬ小さな変化。力が落ちていても尚、魔王の要素に対する感応力の鋭敏さは健在だった。

視線の先には一人の少女がいた。

変わった格好の——ベルトールにとっては皆が変わった格好ではあるが——少女だ。

短く切った黒髪、その前髪には一房赤いメッシュが入っている。赤を基調に金の刺繍が入ったチャイナ・ドレスの上から羽織っているのは、裾の短いドワーフ・ジャケツト。足には動きやすそうなシューズを履き、頭には丸サングラスを載せている。

黒髪に茶色の瞳、丸い耳に灰色の肌は東洋系の特徴だ。

一年の頃は十七、八といったところか。端正な顔立ちで、気の強そうな目元と、活発そうな雰囲気の少女だ。

少女はじつと、鉄柵に背中を預けて正面の壁面のホログラム・ディスプレイの広告を眺めている。

少女の口角が笑みの形に上がった。

その時だ。

踊り、歌うアイドル達のPVが暗転した。

そしてディスプレイの全面に、ポップなドクロのウサギのロゴが一瞬表示され、更に暗転して直後にアイドルのPVでも、ウサギのロゴでもないものが表示される。

卑猥な動画サイトの広告であった。

『あっ、あん！ んっ、あっ！ ああん！』

大音量で嬌声きょうせいが街中に響き、ディスプレイには無修正の裸体が映し出されている。

あまりに唐突な異変に、人々は一瞬足を止めて壁面のディスプレイに視線を向けた。

「うわ、何これ？」

「なんかいきなりエロ広告出てきたんだけどバグ？」

「これ広告ハッキングされてね？」

「ママー。あれ何？」

「見ちゃいけません！」

ざわめき、動揺する群衆。

その中で一人、広告ではなく戸惑う人々を眺めて、手を叩いて大笑いする人物がいた。

ベルトールが視線を向けた黒髪の少女だ。

くつくつと背中を丸めて笑う少女にベルトールは近付いて、古エルド語エルド語訛りが強い共通語で声を掛ける。

「そこな女」

「え？」

少女はびくりと肩を震わせ、周囲を見回す。

「其方だ、黒髪の」

「あ、あたし？」

「うむ」

自分の顔を指差す少女に、ベルトールは鷹揚おうように頷いた。

キョロキョロと周囲を窺うかがいながら、警戒心を丸出しにして少女が口を開いた。

「な、何？」

「其方、今何をした？」

ベルトールは腕を組み、顎で広告を指す。

「え、な、なんの事かな？ あたしわかんなーい、バグかなんかじゃないのお？」

両手を頭の後ろに回し、足を交差させて明後日の方向に視線を泳がせて少女は気の抜けた口笛を吹いた。

「余を前に空言を弄するな。其の方の周囲の霊素が揺らいでからそのな投影像が変じたただろう。霊素の揺れと投影像に意識が向いていたのは周囲では其の方だけ。であれば、何かしたと考えるのが自然であろう」

ベルトールの言葉に、少女は目の色を変えた。警戒と驚愕を濃くして、だ。

「……霊素の揺れであたしのハッキングを見破った……？ そんなのありえない。凄腕だって霊素の揺れなんかでわかるはずなもの……あなた、何者？」

「ふっ、余の姿を見て何者と問うとは。蒙昧は罪であるが、今日は余の再誕を記念する祝日である」

「いや普通に平日だけ……」

「なので特別に恩赦をやろう」

「あーはいはい。いいから、あんた何者なの？」

如何にもめんどくさそうな視線で少女はベルトールを見ながら訊ねる。

視線なぞ気にもせず、ベルトールは両腕を大きく広げて天を仰ぎ、瞳を伏せ、言った。

「——魔王だ」

「——まじで何言ってるの？」

「よもや余の顔を知らぬというわけではあるまい？」

「いや知らんけど……」

全く信じていないという目で少女はベルトールを見るが、すぐに溜息と共に肩を竦めて視線を逸らす。

「それで、あたしを捕まえて都市警察にでも突き出す気？ そんな正義感發揮したところで都市警察クソだから褒賞なんて出ないよ」

「よくわからんが憲兵の類には突き出さぬわ、安心しろ」

ベルトールの言葉に、少女はほっとした様子で胸を撫で下ろした。

「それで、何の用？」

「先程のアレだが、どういう類の魔法だ？ 霊素の揺れの感じで、虚像投影に何かしらを仕掛けたのはわかるが、原理がわからん。この余ですら理解が及ばぬ魔導の技術を用いたであろう其方に少し興味湧いたのだ。余が初見で見抜けなかったとは中々の手練れであ

ろう。立ち振る舞いにも実力から来る自信が見える」

ベルトールの言葉に気を良くしたのか、少女はだらしのない笑みを浮かべる。

「えゝそんなゝ、別に大した事してないってゝ単なるハッキングよ、ハッキング」
声のトーンが少し上がり、ウキウキとした声で少女は言った。

「はつきんぐ……？」

「そ。靈竄術。あたしこう見えて命の危険に曝さらされるような危ない仕事もこなす
エーアルハック靈竄士なの。んで今新宿市で主流のIHM I製のホロディスプレイって術式の論理防壁
に致命的な脆弱性ぜいじやくがあんのね、そこを突いてネットのエロ広告に差し替えたってわけ。
やってる事は単純だけど、この小さな脆弱性を見つけちゃうのがなんつーのかな、あたしの
才能？ みたいな？ けど勘違いしないでね、あれはあたしの知的好奇心とか暇つぶし
とかただいたずらしかっただけとかじゃないって事は先に断っておくわ。まあでもIHM
MIはネット規制したがりだったりフィルタリング掛けたがったりして真まに自由な場所が
ネットであるって思ってるあたしにとっては敵も同然、だからまあこれはそのゝ、あれよ、
一種の社会抗議活動も兼ねてるってワケ。この腐った社会に対する反抗思想はんくわの体現者な
の」

「そ、そうか……」

「そ。ま、そこらにいる並のハッカー程度なら見抜けないくらい脆弱性だけどね、スー
パー天才少女ハッカーであるあたしにだからこそ見破れたし、脆弱性を突く事もできた
のよ。それで——」

止まることなく早口で捲まし立てる少女に、ベルトールは戸惑って口を挟めずにいた。

「ああ、それと」

「んで結局術式変動アルゴリズム自体に——何？ 今ちようどノってきた所なんだけど」
いつまでも喋しゃべっていきそうな少女の話を強引に止めるように、ベルトールが制す。

「マルキユスという名前の男を知っているか？」

「マルキユス？」

不死狩りというものがあつたのであれば、無事ならばまだどこかに身を潜めている可能
性が高い。

こんな所でたまたま出会っただけの少女が、マルキユスの名前を知っているなどという
都合のいい事態になるとは端はなから期待していない。

だがベルトールの思考とは裏腹に、返ってきた答えは予想外のものではあつた。

「それってIHM Iの社長の事？ それなら知ってるよ」

「何………？」

「あそこ」

少女は遠方を指差す。

指の先には、新エルヴン調の白亜の巨塔。

「IHMIの本社ビル。あそこに行けば居場所わかるんじゃない？ マルクユスって言うたらあそここの社長で有名だもん」



石丸^H魔導^M重工^I。

都市戦争の軍需産業で急速な成長を遂げた、旧石丸重工を母体とする超巨大企業だ。

現在新宿市はおろか世界でも有数の企業の一つであり、この街のインフラの重要な心臓部であるエーテルリアクターを建造、管理してエネルギー事業にも携わり、魔導電子工学や情報通信技術の分野でも他社と一線を画す技術力を誇り、新宿市の評議会にも強い発言権を持っている実質的な新宿市の支配者である。

『技術こそが新たな時代の種火になる』というモットーの下に作られた、松明^{トイチ}をモチーフにした社章^{シギル}を高らかに掲げた本社ビルは、新宿市で二番目の高さを誇る建物である。

ベルトールはその本社ビルに今まさに入らんとしているところであった。

マルキュスの力を借りる^{ため}のだ。

世界が滅亡し、不死の王国も壊滅し、ベルトール自体の力が低下した現在、新たな行動指針が必要だった。

当世での社会的地位、権力、財力を保持していれば、今後の目標を立てやすい。そのためにマルキュスの力を借りるのだ。

マキナは連れてこず、一人で黙ってここへ来ていた。

何か隠し事をしているであろうマキナに言えば、止められる可能性があったからだ。

(だがそれが本当にマルキュスであるならば、の話だがな。不死狩りなどというものがありながら、高い社会的地位にいられるのかという疑問符が付く)

そう思いながら、自動四重縦横開閉扉が開き、ベルトールは建物のエントランスロビーに足を踏み入れる。

ロビーは広く、調度品や色彩のバランスが、かつてのマルキュスの館をどこか彷彿^{ほうふつ}とさせ、スーツ姿の人々がまばらにロビー内に存在していた。

その片隅に、異彩を放つ存在があった。

ずんぐりむつくりとした、ピンク色の謎のきぐるみが鎮座しているのだ。

「なんだあの妙な兎^{うさぎ}は……いや、あれを兎と認めるのは兎^{うさぎ}に対する冒瀆^{ぼうとく}か……」

凝視するベルトールにきぐるみが短い手を振るが、彼は無視して視線を移した。エントランスの正面の円形受付ブースに、エルフの女性が立っており、まっすぐにベルトールは女性の前まで歩み寄る。

「何か御用でしょうか？」

突然の来訪者にもエルフの女性は笑顔で対応している。

その表情、そしてその全身を纏う空気に、ベルトールは違和感を覚えた。声音もどこか平坦で、人間味を欠くような、そんな違和感だ。

「マルキウスに取り次げ、ベルトールが来たと言えばわかるだろう」

「——ご訪問の事前確認が取れませんでした。申し訳ございませんが、アポイントメントなしでの面会はお断りしております」

受付はやはり平坦な声と笑顔で、丁寧な、だがきっぱりと応対する。

「いいからマルキウスに取り次げ」

「申し訳ございませんが、アポイントメントなしでの面会はお断りしております」

同じ表情、同じ口調で受付は言う。

「ふう……やれやれ、当世は余を知らぬ愚昧ばかり。仕方あるまい」

さつさと要件を済ませるべく、ベルトールは魔法を使う事にした。

「《王令》」
レクサザ

ベルトールが発動したのは対象の魔力を介して、精神に干渉する魔法である。

いわゆる所謂《魅了》チャームだ。

《魅了》そのものの効果としては対象の術者に対する意識を一時好意的にさせる程度のものだが、魔王の持つ魔法技術を以てすれば、それはもはや《強制》キヤースにも近い効果を發揮する程の力を持ち合わせている。

「マルキウスを呼べ」

王は命令を下す。

絶対遵守の勅令である。

ただか受付のエルフ程度では、拒むことなどできない。できない、はずだった。

「レベルBクラスの魔力反応、及び当機に対する攻撃を検知。不審人物認定、警備部へ連絡、戦闘態勢に移行」

「なっ……!？」

ベルトールは驚愕した。

魔王の精神干渉を受けているようには見えないからだ。

それどころか、ブースを乗り越えて戦う構えを取っている。

「な、なんだ……?」

「何やってんだあれ……」

突然エントランスで起きた騒ぎに、スーツ姿の人々もどよめき、視線を集める。

(防いだのか……!? この女が!?)

ベルトールは瞬時に、己の思考を否定した。

防がれたような感覚はなかった、というよりは単純に全く効果がなかったようにベルト

ールは感じていた。

例えるならば、木や岩に対して精神操作魔法を使ったかのような、そんな手応えだ。

(つまりは……)

先程感じた違和感、今の魔法に対する反応、そして彼女がブースを乗り越えようとした際の動き、それらを総合する。

(機械人形の類……マキナが言っていたのはこれか!)

ベルトールの推理は正しい。受付の女性はエルフではなく、エルフ型のマギノロイド、つまりはヒトを模したロボットだ。

精神操作の魔法を受け付けないのも当然であった。

「対象を制圧します」

「フッ、面白い。当世の人形遊びか、余興程度にはなるだろう」

もう一瞬の後に両者戦闘に入る、その直前である。

「お待ち下さい」

凜とした声がエントランスに響き渡った。

エントランスのどよめきが一瞬で収まる。

「T-260F。戦闘行動を中止」

「管理者命令を確認」

マギノロイドが戦闘態勢を即座に解除してブースへと戻っていき、ベルトールも意識を声の方向の一点に向けた。

そこにはエレベーターの自動開閉扉から出てくる影が一つ。

人間の女性だ。

年の頃は二十代前半。レイディースーツに身を包み、長い髪を後ろで束ねている。

ベルトールは女性から視線を離せなかった。

見目麗しい女性であったが、見惚れていたわけではない。無意識のうちにマギノロイ

ドから彼女の方へ戦闘態勢に入っていたのだ。

美しい抜き身の剣のビジョンがベルトールの脳裏に浮かぶ。
ただの女ではない。

確かな戦闘訓練を重ね、いくつもの修羅場を潜り抜けて裏打ちされた自信、そういったものが付まいから匂い立ってくるかのようだ。

魔王ベルトールをして、一目で強者であると確信させる程の空気を纏っていた。

女性がまっすぐにベルトールへと歩いて来て、眼前一メートル先で立ち止まる。

「弊社の商品、T-260F型が失礼致しました。警備員も兼ねているタイプですので、魔法による攻撃に対して高い攻撃反応を示してしまうのです。申し訳ございませんでした」

愛想のいい笑顔を浮かべ、深々と女性は頭を下げた。

魅力的な笑顔だが、その抜身の剣のような雰囲気は一切崩していない。

「私、マルキウス社長の秘書を務めさせていただいている木ノ原と申します」

「ベルトールだ」

「はい、承知しております。T-260Fとの会話と映像記録を勝手ながら拝見させていただきました。社長にお会いしたい、との事でしたね。マルキウス社長からも通せとの指示が出ておりますので、私が社長室への案内をマター致します」

木ノ原が先導し、ベルトールがその後ろに付く形で二人はエレベーターに乗った。

続きは、1月20日発売のファンタジア文庫で！

©Daigo Murasaki, Kureta 2021